NORIN TEN：人類を飢餓から救った日本の小麦

世界中の農学研究者が知っている日本の小麦品種があります。その名は小麦農林10号。国際的にはNORIN TENです。多くの一般の人々はこの品種を知りませんが、その恩恵は受けています。
NORIN TENは1935年に育成されました。草丈が短くなる遺伝子（半矮性遺伝子）を持つため、背が低く茎が強靭であることが最大の特徴です。当時の小麦は背が高く、肥料を多く与えると実った穂の重さに耐えられず倒伏してしまいました。一方、NORIN TENの短く強い茎は重い穂を支え収穫量の増加につながったのです。
この特徴は肥料を多く与え機械で収穫する近代農法に非常に適合したものでした。

NORIN TENは第２次世界大戦後のGHQによる遺伝資源収集によりアメリカに渡ります。世界中で小麦の育種親として活用され半矮性の多収品種が育成されました。世界の小麦品種の大部分がNORIN TENの遺伝子を引き継いでいます。これらの品種と多肥栽培技術により20世紀後半に小麦の生産量は約３倍に増加し、多くの開発途上国で懸念された食料危機は回避されました。この、いわゆる「緑の革命」の功績でノーベル平和賞を受賞したノーマン・ボーローグ博士は「私の研究はNORIN TENなしでは完成しなかった。」と述べています。

NORIN TENは半矮性遺伝子を古い日本の小麦から受け継いでいます。雨が多く小麦栽培に不向きな環境の中で、日本の農民達はこの遺伝子を持つ小麦を選び育てて来たのです。小麦の生産性向上の偉業は研究者だけでなく、農業生産者、品種や栽培技術の開発・普及に携わった人など多くの人々によってなしとげられたものです。NORIN TENを育成した稲塚権次郎氏が農商務省農事試験場（現在の農研機構）に入省したのは1918年。
100年たった今もその志と業績は私たちの理想です。「農研機構は、みなさまと共に食と農の未来を創ります。」